

“焼け石に水”しかし・・・(1995年3月号掲載・橋本 誠也)

非常招集により参集した5人で1隊を編成し、まだ消防隊のっていない下沢通2丁目の火災現場への出動指示を受けた。署ガレージ内のポンプ車はもちろん、消防車両はすべて出動し、唯一広報車が1台残されただけである。僅かに残された可搬式ポンプ、ホース、水損防止用筒先などを掻き集めるようにして広報車に積み込み、不十分な資機材に不安を感じながら出発した。

倒壊した建物や押し潰された駐車車両などに道を阻まれ、ようやく到着した消防隊を見つけるなり、付近の住民が駆け寄り「こっちこっち」と訴えている。倒壊した建物数棟が赤々と燃え盛り、隣接した建物へと延焼しつつある。直ちに放水を開始したいが、消火栓から水は出ない。もちろん水利地図はなく記憶を頼りに数100メートル東側に防火水槽があるはずと、すがりつく住民をふりきり移動した。

「隣の家がもたれかかって崩れそう」「ガスが漏れている」「つぶれた家の中に人がまだいるかもしれない」等、通常ならどれをとっても大変な出来事を訴えてくる住民に、応答する暇もなく、ひたすら火点を目指してホースを延ばした。

ようやく火点付近まで届いたホースに筒先をつけ、放水を始めるが、ますます拡大した火災に対する消防の力は、僅か1線のホースと、その先に付けた水損防止用ノズルだけ。立ちうちできるはずがない。状況のわからない住民は、そんな我々に対しおそらく「やっとな火を消してもらえるとでも思ったに違いない。

火災はどんどん西から東へと拡大している。

「どこかで延焼阻止を」と考え、文化住宅 2 階通路へ進入。ホースを吊り上げ、放水を開始しようとした瞬間、1 階から突然炎が噴き出し、立てかけられた梯子を使い命からがら脱出。すでに手はつけられない状態である。

更に隣の建物に進入し、文化住宅からの延焼阻止のための放水を開始。住民から「私のマンションに燃え移りそう」との叫び声に誘導されながら確認に行くと、火の勢いは予想をはるかに上回り、隊員に「すでに火が入っている」と告げ、ホースを引っ張り、ようやく屋外へと脱出した。

「なぜ私の家に水をかけてくれないのか」との家人の声をよそに筒先を移動する。

唯一炎上建物からの延焼阻止に成功したマンションを除き、ことごとく火勢に突破された延焼阻止活動。結果的に 4,000 平方メートルを越える焼損である。可搬式ポンプをかつぎ移動を数回繰り返し、10 数時間に及ぶ放水の結果、防火水槽の水も底をついた頃、ようやく火勢は衰えた。

兵庫県南部地震により発生した災害で、家族を失った方、家を失った方など、被災された方々の悲しみは計り知れない。

一方、「消防は何している」「水が出るのが遅い」「早く消せ」と様々な罵声を浴びながらも、少しでも多くの人を、少しでも多くの建物を守ろうと、私たち消防隊員は、体力の限界をはるかに越えた

状態で、一生懸命、消火活動・救出活動に力の限りを尽くした。このことを少しでもわかっていただければ幸いです。